

事業活動実績報告書

施設名	幼保連携型認定こども園そあ
教育理念	“1人ひとりが主役になる教育保育 自然の中で全身を使って五感を育む・時間を忘れて遊ぶ・赤ちゃんからお年寄りまで関わり合う生活・ほんものの食事”
事業の区分 (5領域)	健康 ・ 人間関係 ・ 環境 ・ 言葉 ・ 表現
1 事業名	心と体を育む園庭環境
2 実施期間	令和 6年 4月 1日 ～ 令和 7年 3月 31日

3 取組概要	(取組日) 令和 6年 4月 1日 ～ 令和 7年 3月 31日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること ・火起こし 前年度の5歳児へのあこがれから「自分で火を起こしたい」といって火起こしを行う姿が多く見られた。職員は火が付かない体験や雨の中での火起こし体験等、子どもたちにとって考える機会を大切にしたい。その結果、さらに挑戦する意欲が生まれ、竹での炊飯や焼き芋、ピザづくりといった体験にも広がりを見せた。 
	(取組日) 令和 6年 4月 1日 ～ 令和 7年 3月 31日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 生き物 園庭や公園等で時期により異なる生き物を見つけ、どのようにして捕まえるかという遊びが盛り上がった。その遊びをきっかけに、観察や飼育といった体験へと広がりを見せた。7月には、親子参加型の夜間の虫探しを行い、セミの羽化や夜間ならではの生き物の暮らしを学んだ。また、その後は、園庭で野宿をし、虫の鳴き声を聴きながら夜を過ごし、早朝の虫観察を行なった。 
	(取組日) 令和 6年 4月 1日 ～ 令和 7年 3月 31日 (実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること ・ビオトープ、池づくり 池づくりという土に触れる体験を通して、匂い、感触、色や形等五感を使って土を味わうことができた。土を掘っていくいつものショベルでは掘ることができないほどの硬い土の存在に気づき、さらに深く掘る道具やショベルカーの役割を知る機会となった。更には、ショベルカーを使う仕事にあこがれを抱き職業への興味関心にもつながった。土の中に興味を持った子どもたちは、木の根っこを掘るという体験をし、複雑に絡み合う根っこを見て「根っこの迷路だ!」と遊びにする姿が見られた。 池づくりを通して、子どもたちは土と深く関わった。スコップで土を掘ると、湿った土の独特の匂いが鼻をくすぐり、ぬるっとした感触が手に伝わってきた。予想以上に硬い土に遭遇した時は、いつものショベルでは掘れないことに戸惑いながらも、より深く掘るための道具やショベルカーの役割について考え始めた。土の中に興味を持った子どもたちは、土の中から出てきた木の根っこに目を輝かせ、「これは根っこの迷路だ!」と根っこを辿って遊んでいる姿も見られた。この体験を通して、子どもたちは土の多様な性質や、それを扱う道具、そして職業への関心を深めた。 

3 取組概要	(取組日) 令和 6年 4月 1日 ~ 令和 7年 3月 31日	
	(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 以前子どもたちと作ったピザ窯に、雨の日でも子どもたちの興味に応じてピザづくりができるよう、屋根をつけることにした。いつも職員が作業している様子を見ていた子どもたちは、見様見真似だがボルトを回してみたり、単管パイプの高さを合わせてみる中で、工具の重さや単管パイプの重さを感じ、友達と協力して持ったり、お互いにわからない中で教えあう姿が見られた。単管をクランプに乘せる際には、クランプの向きを自分たちで考えながらおいていた。反対向きで置いていた時には「この単管が落ちないようにするためにはどうしたらいい？」と聞くと、クランプの向きを考え置き換えていた。 大人の真似をしているだけでまるで自分も大人になったかのような子どもたちは、年下の子が見に来ると「近くに來たら危ないからそこで見ててね」といつも職員が子どもに言っていることを言い、先生になりきっていた。 屋根が出来上がると、「これでピザをいつでも作れるようになるね！」「ピザじゃないものも作っていききたいね！」と楽しみな気持ちからいろいろな発想が広がっていた。子どもが活動で使う場所を、可能な限り子どもと一緒に作り上げることで、今ある環境が出来上がるまでの大変さや、その場所を大切にしていこう気持ちが芽生えるように考えられる。	
	(取組日) 令和 年 月 日 ~ 令和 年 月 日	
	(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること ・魚漁体験 依頼先の都合により中止	写真添付 (区HPで公開が可能な写真を添付してください) 活動内容が分かるもの 取組に関するもの
	(取組日) 令和 年 月 日 ~ 令和 年 月 日	
	(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 	写真添付 (区HPで公開が可能な写真を添付してください) 活動内容が分かるもの 取組に関するもの
	(取組日) 令和 年 月 日 ~ 令和 年 月 日	
	(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 	写真添付 (区HPで公開が可能な写真を添付してください) 活動内容が分かるもの 取組に関するもの
	(取組日) 令和 年 月 日 ~ 令和 年 月 日	
	(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 	写真添付 (区HPで公開が可能な写真を添付してください) 活動内容が分かるもの 取組に関するもの

効果検証報告書

施設名	幼保連携型認定こども園そあ		
教育理念	1人ひとりが主役になる教育保育 自然の中で全身を使って五感を育む・時間を忘れて遊ぶ・赤ちゃんからお年寄りまで		
事業の区分(5領域)	健康・人間関係・環境・言葉・表現		
1 事業名	心と体を育む園庭環境		
2 事業概要	現在井戸、水路、田んぼを中心にビオトープの環境があり、昆虫や、水辺の生き物の観察、稲作など、都会の中では中々経験できない体験の機会を提供し、講師を招いて生き物について教えてもらったり、収穫した野菜を園庭や作成したピザ窯で調理したりすることにより、ビオトープや田んぼで体験したことが学びになる取り組みを行う。		
計画時	3 実施体制	取組に必要な環境(人員、事業の遂行に必要な技能やノウハウ等)の保有状況 “建築士(主幹教諭、用務) ・保育、園児指導(幼児クラス担任、散歩見守り職員)・外部講師(カワセミの里自然観察員、環境カウンセラーとして葛飾区生物多様性推進協議会委員、緑化推進協力員、3R推進パートナー、地球温暖化対策推進協議会委員、消費生活審議委員、環境省臨時審議委員在籍 ・野外救急救命国際資格ILCOR準拠Adult Child Infant CPR+AED(ウィルダネスジャパン)の受講(今後、全職員受講予定)・大学院在学中の職員・ユンボ資格取得者・国際MFAインストラクター資格者”	
	事業後	3についての効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 環境カウンセラーの協力を得ることで、子どもたちは野菜の栽培を楽しみながら体験し、自然との関わりを深めることができた。単に野菜を育てるだけでなく、野菜の成長過程や植物の不思議さに気づくことで、自然の営みを感じ取ることができた。また、虫や生き物の探索においても、専門家の助言を活かし、子どもたちが自ら発見する楽しさを味わいながら観察を続けている。観察する時期や時間帯の違いによって現れる虫や生き物が異なることを学び、自然環境の多様性に触れることで、興味や好奇心が育まれている。 活動のデザインにおいては、知識や学習を一方向的に提供するのではなく、子どもたちが遊びを通じて自然に親しむ機会を大切にしている。例えば、野菜の収穫を「引っこ抜き大会」として楽しむ工夫や、昆虫探しを「かくれんぼ」として体験することで、自然と触れ合うこと自体を目的とし、主体的な活動が促されている。 こうした取り組みから単発の行事として終わらせるのではなく、季節の移り変わりを感じながら、自然体験を繰り返し楽しむことができるようにしている。その結果、自然との関わりが日常の中に根付き、子どもたちが継続的に自然に親しむことができる環境が整えられてきたと考えている。
計画時	4 事業のねらい	園庭の自然環境を整備して、園児が法人の教育理念に掲げた4つの柱を「自然の中で全身を使い五感を育む」「時間を忘れて遊ぶ」「赤ちゃんからお年寄りまで関わりあう生活」「ほんものの食事」を体験できるようにする。 ・園児が様々な体験を通して、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿及び、生きる力の基礎を育む。 ・昨年度まで、園庭の中の生き物や活動によって、園庭を深めた経緯がある。今年度は、戸外の自然に触れながら、園庭に持ち込み取り入れていく。	
	事業後	4についての効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 戸外の自然として、公園で採取した生き物を持ち込み触れ合う中で、触りすぎたりエサを与えないことにより死んでしまうことや、命の儚さから飼育についての関心のきっかけが生まれた。子どもたちは、自然といった自分たちの思い通りにいかないことに沢山出会い、自分たちで考えて行動を起こすという体験を繰り返した。この体験は、生きる力の基礎が芽生えていると考える。 戸外から持ち込んだ生き物を触りすぎてしまったり、適切な餌を与えなかったりすることで、生き物が死んでしまうという直接的な経験をした。この経験は、命の儚さや、生き物に対する責任感を深く理解する上で非常に重要な役割を果たしたと考えられる。生き物の死という経験は、悲しみだけでなく、生き物を飼育することへの関心となった。自然相手では、自分の意図通りに事が運ばないことを何度も経験した。この経験を通して子どもたちは困難に立ち向かう力、柔軟な思考力、そして自立心といった「生きる力」の基礎を培ったといえる。

5 取組の内容	計画スケジュールを含む詳細な取組内容、経験させたい内容等 ・4月から3月カワセミの里 自然観察員による自然観察、遊び指導、むしむしクラブ、川遊び 自然観察員やボランティアの人たちより、生き物についての知識を遊びを通して学ぶことにより、これまでの園庭や水元公園で体験したことを知識として子どもたちが触れる機会を作る。 ・4月から～翌年3月まで ビオトープでの活動とビオトープの保全、ワークショップ ・4月から～翌年3月まで ピザ窯ワークショップ及び火おこしの活動 ・4月から～翌年3月まで 異年齢児保育 ・4月から～翌年3月まで 戸外活動 ・4月から～翌年3月まで ムシムシクラブ
事業後	5についての効果・検証 事業実績から推測される効果や改善点等 園庭、園外、川といった多様な環境での活動を通して、子どもたちは自然への興味関心を高めたと考えられる。 園庭での植物観察、園外散策、そして川での生き物探しなど、多様な自然体験活動において、子どもたちは常に積極的に参加していた。例えば、川辺では、網を使って熱心に生き物を探したり、見つけた生き物を互いに見せ合いながら、その特徴や名前について活発に話し合ったりする姿が見られた。自然環境を活かした活動を通して、子どもたちは協同性や表現、主体的に学ぶ姿勢を育んだ。見つけた生き物をみんなで観察し、図鑑で調べたり、全身でなりきったり、言葉で伝え合ったりする様子がみられた。これらの経験を踏まえ、今後も自然体験学習を継続し、子どもたちの成長を支援していきたい。
事業後	環境構成についての効果・検証 事業実績から推測される効果や改善点等 前年度に引き続き、池づくりやピザ窯づくりを行なった。地面を掘る中で土の感触や匂い、水の音等五感を使う体験となった。また、水路が土や葉っぱに覆われ詰まるという出来事をきっかけに、葉っぱをすくったり、水を押し流したりといった自然の整備の仕方を知る機会にもなった。 前年度に引き続き、子どもたちと一緒に池づくりを行なった。スコップで地面を掘る作業では、土の感触や匂い、そして水が流れ出した時の音など、五感すべてに使った体験となった。特に、子どもたちは土の粘り気や、乾いた土と湿った土の違いに気づき、熱心に観察していた。また、完成した水路が土や葉っぱで詰まってしまったことで、困り顔の子どもたちもいたが、自分たちで葉っぱをすくったり、水を流したりする中で、自然の維持管理の必要性や方法を学ぶ貴重な機会につながった。
7 期待される効果 児童の姿	取組を通じて期待される児童の姿や効果等 昨年度の取り組みの中で、子どもたちがやってみたいことや少し難しいことに挑戦し、方法を考え実行する過程では、失敗から学び、成功への道を模索する重要な経験を積む。この一連の過程を通じて、考える力が養われ、自己効力感や自信が高まったと考えている。こうした活動によって、異年齢児クラスの中で、年上の子から年下の子へ伝承している。 昨年と同じ事業に取り組むことで、子ども達にとって再挑戦出来る機会を作り、できなかったことから出来る過程を提供することで、昨年と同様の教育効果や、経験値によってより高い教育効果を得ることができると考えている。
事業後	7についての効果・検証 事業実績から推測される効果や改善点等 火おこしやピザ窯ワークショップ、川の活動においては特に昨年度の年上の様子を見て、あこがれを抱き「自分一人で火を起こしたい」や「自分も川でカニを見つけない」と期待をもって活動を行っていた。実際に行なうことで火がつかなかったり、カニが怖くて触ることができなかったり、上手くいかないことに出会い、やり方を変えては再挑戦をする姿が見られた。この経験を通して、目標達成のための粘り強さや考える力を育んだと考えられる。
8 効果検証 総括	事業を通しての感想、今後の教育・保育に向けて 今年度の取り組みを通して、園庭の自然環境が子どもたちの学びに欠かせない要素であることを改めて認識した。特に虫の探索活動では、子どもたちは虫を捕まえる難しさ、命の儚さ、飼育の必要性といった様々な課題に直面した。例えば、ダンゴムシを捕まえようと追いかけるうちに逃げられてしまう経験から、『静かに捕まえに行こう』という工夫が生まれたり、カブトムシの幼虫を飼育する中で、餌となる植物の種類や与え方を調べ、試行錯誤する様子が見られた。こうした活動を通して、彼らは単に知識を学ぶだけでなく、『考えてやってみる』ことの面白さや、試行錯誤を繰り返す過程の重要性を学んでいたと考えられる。 園庭の自然環境、戸外から持ち帰った生き物の飼育、自然物の活用を通して、子どもたちは遊びの中で『やってみる』『上手くいかないことを考える』『再びやってみる』というプロセスを自然に繰り返し、主体的な学びを深めていったと感じた。 今後の保育・教育においても、園庭の自然環境を継続的に整備し、子どもたちが自然と触れ合う機会を保障することが、主体的に考える力、ひいては生きる力の育成に不可欠であることを再確認した。